

# 成人女性の生きがいに関する生涯発達心理学的研究 IV

## 老後の生き方・生きがい

井森 澄江\*, 西村 純一\*\*, 大井 京子\*\*\*, 井上 俊哉\*\*\*\*

(平成 18 年 10 月 5 日受理)

### Life-span Development Psychological Study of the Purpose in Life among Adult Women IV : What Women Live for in Their Old Age

IMORI, Sumie NISHIMURA, Junichi Ooi, Kyoko and INOUE, Shunya

(Received on October 5, 2006)

キーワード：生涯発達心理学的研究, 女性の老後の生き方, 生きがい

Key words : life-span development psychological study ; life of women in their old age ; the purpose in life

#### 本研究の問題・目的

本研究は女子大学, 短期大学 (旧制高等専門学校を含む) を卒業した成人女性の, 現在の, 生きがい・生き方, 仕事, 家庭, 社会等の意味を探っていこうとするものである。IIIでは各世代の女性の「理想の生き方・実際の生き方」について分析, 検討した。IVでは長寿, 高齢化時代の到来にともなう, 従来考えられなかった長期にわたる老後期間の生き方および生きがいについて分析していく。

幸せな老いについては, 欧米の主観的幸福感に関する尺度の日本版やその改訂版を利用して検討されてきた (杉山他 1981)。しかし, それでは日本人特有の微妙な感情の質的違いを捉えることができない, 幸福な老いではなく, その結果を測定しているに過ぎないなどさまざまな批判が生じてきている (西村 2005)。財団法人シニアプラン開発機構のサラリーマンの生きがい調査 (財団法人シニアプラン開発機構 2002, 2003) では, 日本人の幸福な老いを, わが国固有の生きがいの側面から捉えることを目指し, 日常生活感覚に沿って, 日本のふつう

のサラリーマンが感じていると見られる生きがいのカテゴリリーを用意し, 35歳~74歳までの厚生年金基金加入者・受給者3189人の生きがいについて分析した。そのうちの生きがい対象の等質性分析から, 西村 (2005) はサラリーマンの生きがい対象の背景には「気ままな生活 対 社会的責任のある生活尺度」と「内面的充実 対 心身の健康づくり」の2つの尺度が存在することを示し, この尺度と年齢, 性別との関連を検討し, ①男女とも年齢が上がるとともに社会的責任のある生活から気ままな生活に移行する傾向がある②男性より女性の方が社会的責任のある生活より気ままな生活を求める傾向が強い③女性は年齢が上がるとともに内面的充実から心身の健康づくりに移行する傾向がうかがわれる④男性は若い頃から内面的充実を求める傾向が弱く, 年齢が上がるとともに心身の健康づくりの方へ移行する傾向がうかがわれることを明らかにした。

本研究では, この一連の研究を参考にしつつ, 就労女性だけでなく, 大学を卒業した20代から80代までの成人女性全般にわたる幸せな老いと老後の生き方について年代差, 世代差分析を行うとともに, 職業との関連, 結婚の有無との関連等について検討していく。なお, 本研究では現在の各年代において考える幸福な老いと老後の生き方について問題にしている。

\* 文学部心理教育学科発達心理研究室

\*\* 文学部心理教育学科老年心理研究室

\*\*\* 文学部心理教育学科資料室

\*\*\*\* 教養部情報処理研究室

## 方法

1. 対象者；首都圏のA女子大学，短期大学（旧制高等専門学校を含む）を卒業した女性979名（範囲20歳～92歳）（年齢構成などの詳細は井森他（2006）参照）

2. 実施時期；2004年10月～12月

3. 質問紙郵送調査；女子大学同窓会名簿からランダムにサンプリングされた4200名に質問紙を郵送，記入後返送を依頼した（回収率23％）。

## 4. 質問紙の概要

フェイスシート（年齢，職業，結婚の有無，子どもの有無，きょうだいの有無，同居の家族，現在の健康状態，育った環境，子どもの頃の母親の就労形態等）をはじめ，Q1「結婚，親になるなどのライフイベントが生じるのにふさわしいと考える時期」（10項目），Q2「理想の生き方」，Q3「実際の生き方」，Q4「夫婦関係」（12項目），Q5「現在の愛着（IWM尺度）」（18項目）と「就学前の母子関係」（9項目），Q6「親の養育態度（PBI）」（25項目）と「青年期の親への愛着（IPA）」（28項目），Q7「親と自分との関係」（21項目），Q8「老いてくる親への世話についての態度や気持ち」（28項目），Q9～Q14「自分自身や親の高齢化に伴う意識・生活に対する希望」，Q15「幸福な老いについての考え」，Q16～Q18「生き甲斐」，および子育て経験者のみに回答を依頼したFQ12～FQ14「自分自身の子育て行動・感情」の項目からなる。

## 5. 分析内容

今回の報告では、「老後の生き方」として、「理想の生き方，実際の生き方」における観点である‘結婚・出産（子ども）’と‘仕事’に対応するように，‘家庭’（同居の家族・介護をだれに頼みたいか）と‘生活の基盤’（老後の生活費について誰をあてにしているか）をとりあげ，この二側面から老後の生き方を捉える。また「幸福な老い」として「生きがいの対象」の2つの尺度（西村2005）－気ままな生活対社会的責任のある生活の尺度，内面的充実対心身の健康づくりの尺度－に関連した項目を取り上げて，この二方向から幸福な老いについての考えを捉える。

具体的な質問項目としては

「老後の生き方」

<家庭（同居の家族・介護をだれに頼みたいか）>

Q9.あなたは，老後，だれかと一緒に暮らしたいですか。  
ひとつだけ○をつけてください。

- 1.ひとりで暮らしたい
- 2.だれかと一緒に暮らしたい

付問

2.に○をつけた方は，一緒に暮らしたい方すべてに○をつけてください。

- 1.配偶者
- 2.息子
- 3.娘
- 4.息子の嫁
- 5.娘の婿
- 6.孫
- 7.自分のきょうだい
- 8.友達
- 9.その他（ ）

Q10.もし仮に，あなたご自身が寝たきりとなり身の回りの世話が必要となった場合，主にだれに身の回りの世話を頼みたいと思いますか。ひとつだけ○をつけてください。

- 1.夫
- 2.息子
- 3.娘
- 4.嫁
- 5.婿
- 6.孫
- 7.きょうだい
- 8.家政婦を雇う
- 9.ホームヘルパー（公共機関からの派遣）
- 10.自治体などの公的な老人ホームの施設
- 11.民間の高級有料老人ホーム
- 12.その他（具体的に ）

<生活の基盤（老後の生活費について誰をあてにしているか）>

Q12.あなたは，老後の生活費について主にだれをあてにしていますか。ひとつだけ○をつけてください。

- 1.子ども
- 2.自分
- 3.夫
- 4.公的扶助
- 5.その他（具体的に ）

「幸福な老い」（老後の生きがい）

<気ままな生活対社会的責任のある生活の尺度，内面的充実対心身の健康づくりの尺度に関連した項目>

Q15.幸福な老いについてあなたが日頃考えていることをうかがいます。次にあげることがらの中で，あなたの優先順位の高いものを3つまで選んでください。また，その中で一番優先順位の高いものは何ですか。

- 1.長生きできること [健康づくり・気まま]
- 2.健康であること [健康づくり・気まま]
- 3.経済的に豊かであること [社会的責任]
- 4.夫婦円満であること [社会的責任]
- 5.子どもたちと一緒にくらすること [社会的責任]
- 6.友人が多いこと [内面的充実]★
- 7.生きがいとなる仕事をもつこと [社会的責任]
- 8.生きがいとなる趣味をもつこと [気まま]
- 9.自分らしくあること [内面的充実]

10.その他（ ）

[ ]に関連する尺度名を示した。配布した質問紙には、[尺度名]は記載されていない。★なお、6.友人が多いことはサラリーマンを対象にした場合は内面的充実の項目であるが、専業主婦の場合は健康づくり・気ままの項目となるのではないかと考えられる。

結果と考察

1. 老後の生き方

1) <家庭(同居の家族・介護をだれに頼みたいか)>

(1) 老後だれかと一緒に暮らしたいか、ひとりで暮らしたいか

年代別の割合を表1に、配偶者の有無(未婚・既婚・離別・死別)別割合を表2に、職業別割合を表3に示した。

どの年代でも「だれかと一緒に暮らしたい」が多くの割合を占める。若い年代ほどその割合は多く、20代では99%が「だれかと一緒に暮らしたい」と答えているが、その割合は年代が高くなるにつれ徐々に減少し、60代70代では70%台になる。さらに80代では「ひとりで暮らしたい」が45%と急増する(表1参照)。

表1

年代	ひとりで暮らしたい	だれかと一緒に暮らしたい
20	1%	99%
30	8%	92%
40	14%	86%
50	20%	80%
60	28%	72%
70	26%	74%
80	45%	55%
全体	19%	81%

表2

配偶者の有無	ひとりで暮らしたい	だれかと一緒に暮らしたい
未婚	20%	80%
既婚	16%	84%
離別	30%	70%
死別	44%	56%
全体	20%	80%

配偶者の有無(表2)から見ると死別の場合「ひとりで暮らしたい」が44%と多くなっている。60代以降、

とくに80代で(その45%が死別と)死別の割合が高いことから、高い年代で、配偶者と死別した場合、子どもなどの同居を望む女性もいるが、自立的な且つ自分らしい生活をつづけたいと「ひとり暮らし」を望む女性も半数近くいることがわかる。井森他(2006)の今回と同じデータによる実際の同居の家族の分析において、実際のひとり暮らしは20代から60代までは4%~6%であるが、70代では19%、80代では36%になっていた。だれかと一緒に暮らしている場合、50代までは子どもを含む家族が主であるが、60代では夫と2人家族が主になり、70代、80代では夫と2人家族の場合もあれば、子どもや孫を含む家族の場合も、1人(単身)暮らしを選ぶ場合もかなりあることが示されていた。現在の高齢女性の「伝統的家族観、女性観'老いては子に従う'ではなく'老いても自立し、子に依存しない'」姿が窺える。ただし、今回のデータは大学を卒業した女性に限定されている。この高齢での自立的な且つ自分らしい生活をつづけたいと「ひとり暮らし」を望む傾向が、学歴と関係している可能性もある。

表3

職業	ひとりで暮らしたい	だれかと一緒に暮らしたい
会社・団体などの役員	8%	92%
管理的職業	11%	89%
事務的職業	11%	89%
専門的・技術的職業	13%	87%
販売サービスの職業	10%	90%
技能的・労務的職業	27%	73%
自営業主・家族従業員	28%	72%
自由業	7%	93%
専業主婦	19%	81%
無職	39%	61%
その他	27%	73%
全体	20%	80%

職業別(表3)については、この論文では、表の会社役員から技能的・労務的職業までをサラリーマンとひとまとめにし、自営業主・家族従業員と自由業をまとめ自営業・自由業とし、この2種類の職業と専業主婦の計3種類に大別して分析する。サラリーマン、自営業・自由業、専業主婦とで「ひとりで暮らしたい」割合をみると、自営業・自由業が25%と最も多く、ついで専業主婦19%、サラリーマン12%となっている。自営業・自由業は50代60代が多くを占めている(53%が50代60代)

ことから年齢、配偶者の有無による影響を受けているとは考えにくい。自営業・自由業のほとんどは自営業主・家族従業員であり（自営業・自由業の84%を占める）、職種柄、一日中家族と一緒にいることから生じる軋轢がひとり暮らし願望につながっているとみることができる。

(2) 老後だれかと一緒に暮らしたい—具体的にだれと一緒にくらしたいか

年代別の割合を表4に、配偶者の有無（未婚・既婚・離別・死別）別割合を表5に、職業別割合を表6に示した。

年代別（表4）にみると、どの年代でも配偶者が最も多くの割合を占める。70代、80代でその割合が減少す

るが、この年代で死別の割合が高いことから現実を反映していると考えられる。配偶者以外ではどの年代でも娘が一番多く、次に息子、孫となっている。ただし30代のみ娘の次に友達が多く選ばれている。現在では母と娘の関係の強さが、息子に従うという伝統的な男系家族観を凌いでいると考えられる。また30代で友達が多く選ばれていることから血縁の家族から情緒的家族への志向も窺える。

配偶者の有無（表5）から見ると既婚、未婚の場合は配偶者が最も多くの割合を占める。次に娘を選ぶ割合が多い。死別の場合は息子が一番多く選ばれ、二番に配偶者が選ばれている。前にも述べたように70代、80代で死別の割合が高いことから、70代、特に80代では「老い

表4 老後に誰と暮らしたいか（年代別）

年代	配偶者	息子	娘	息子の嫁	娘の婿	孫	きょうだい	友達	その他	計
20	97%	14%	20%	8%	7%	7%	6%	3%	3%	166%
30	87%	12%	28%	2%	6%	10%	9%	14%	2%	170%
40	84%	18%	20%	9%	7%	17%	10%	10%	5%	179%
50	85%	26%	36%	12%	10%	22%	11%	9%	2%	213%
60	86%	17%	32%	10%	6%	15%	11%	8%	8%	194%
70	77%	28%	41%	18%	8%	24%	8%	8%	3%	214%
80	61%	39%	43%	17%	9%	26%	13%	0%	4%	213%
全体	85%	20%	30%	10%	7%	17%	9%	8%	4%	191%

表5 老後に誰と暮らしたいか（配偶者の有無別）

配偶者の有無	配偶者	息子	娘	息子の嫁	娘の婿	孫	自分のきょうだい	友達	その他	計
未婚	68%	14%	18%	5%	5%	7%	9%	10%	3%	138%
既婚	74%	15%	26%	7%	6%	14%	7%	6%	2%	157%
離別	5%	10%	19%	5%	0%	5%	10%	19%	29%	100%
死別	21%	27%	19%	19%	6%	19%	6%	3%	3%	122%

表6 老後に誰と暮らしたいか（職業別）

職業	配偶者	息子	娘	息子の嫁	娘の婿	孫	自分のきょうだい	友達	その他	計
会社・団体などの役員	67%	19%	26%	4%	85%	11%	7%	4%	4%	226%
管理的職業	78%	0%	11%	0%	78%	0%	0%	11%	0%	178%
事務的職業	68%	8%	19%	5%	83%	5%	8%	8%	6%	210%
専門的・技術的職業	73%	19%	26%	9%	77%	15%	6%	11%	2%	238%
販売サービスの職業	74%	16%	13%	3%	84%	6%	10%	10%	6%	223%
技能的・労務的職業	73%	9%	18%	0%	73%	0%	0%	0%	0%	173%
自営業主・家族従業員	63%	17%	30%	12%	68%	13%	11%	5%	3%	222%
自由業	75%	6%	25%	0%	69%	13%	6%	13%	0%	206%
専業主婦	71%	15%	24%	8%	76%	13%	7%	4%	3%	221%
無職	33%	21%	24%	15%	54%	18%	6%	5%	3%	177%
その他	67%	16%	21%	9%	61%	18%	11%	9%	4%	214%

でも自立し、子に依存しない'タイプと伝統的な男系家長家族関係を保っている'老いては子に従う'タイプがあるといえるかもしれない。

職業別(表6)についてはサラリーマン72%, 専業主婦71%, 自営業・自由業65%が配偶者を選んでいる。自営業・自由業は、「ひとりで暮らしたい」割合が高いが、誰かと暮らしたい場合でも、配偶者を選ぶことが少

ない。

(3) 介護をだれに頼みたいか

年代別の割合を表7に、配偶者の有無(未婚・既婚・離別・死別)別割合を表8に、職業別割合を表9に示した。

年代別(表7)にみると50代までは夫が一番多く選ば

表7 老後の介護を誰に頼みたいか(年代別)

年代	夫	息子	娘	嫁	きょうだい	家政婦を雇う	ホームヘルパー(公的機関からの派遣)	自治体などの公的な老人ホームの施設	民間の高級有料老人ホーム	その他
20	37%	0%	21%	0%	2%	1%	13%	21%	4%	1%
30	29%	0%	16%	0%	3%	0%	22%	16%	15%	0%
40	23%	1%	16%	0%	0%	3%	16%	22%	16%	2%
50	26%	1%	13%	1%	0%	2%	25%	24%	7%	1%
60	20%	1%	16%	2%	0%	1%	21%	27%	10%	3%
70	15%	0%	17%	4%	1%	4%	24%	17%	15%	3%
80	8%	0%	18%	10%	0%	10%	21%	13%	15%	5%
全体	23%	0%	16%	2%	1%	2%	21%	21%	12%	2%

表8 老後の介護を誰に頼みたいか(年代別)

配偶者の有無	夫	息子	娘	嫁	きょうだい	家政婦を雇う	ホームヘルパー(公的機関からの派遣)	自治体などの公的な老人ホームの施設	民間の高級有料老人ホーム	その他
未婚	25%	0%	18%	0%	3%	1%	19%	24%	8%	2%
既婚	26%	0%	16%	1%	0%	3%	20%	21%	11%	2%
離別	0%	5%	10%	0%	0%	5%	20%	30%	25%	5%
死別	3%	0%	22%	6%	1%	2%	28%	17%	17%	5%
全体	23%	0%	16%	2%	1%	2%	21%	21%	12%	2%

表9 老後の介護を誰に頼みたいか(職業別)

職業	夫	息子	娘	嫁	きょうだい	家政婦を雇う	ホームヘルパー(公的機関からの派遣)	自治体などの公的な老人ホームの施設	民間の高級有料老人ホーム	その他
会社・団体などの役員	20%	0%	12%	12%	0%	8%	16%	12%	20%	0%
管理的職業	22%	0%	33%	0%	0%	0%	33%	0%	11%	0%
事務的職業	22%	1%	16%	0%	3%	1%	16%	29%	10%	1%
専門的・技術的職業	27%	0%	18%	0%	2%	2%	14%	25%	10%	1%
販売サービスの職業	20%	3%	17%	0%	0%	7%	20%	20%	10%	3%
技能的・労務的職業	50%	0%	0%	0%	0%	0%	30%	20%	0%	0%
自営業主・家族従業員	17%	0%	21%	1%	0%	3%	18%	19%	19%	1%
自由業	29%	0%	21%	0%	0%	0%	43%	0%	7%	0%
専業主婦	26%	0%	14%	2%	1%	2%	22%	19%	12%	2%
無職	9%	1%	17%	3%	0%	2%	28%	24%	12%	5%
その他	26%	0%	20%	2%	0%	0%	22%	19%	9%	2%
全体	23%	0%	16%	2%	1%	2%	21%	21%	12%	2%

れ、ホームヘルパーまたは老人ホームが二番目に多く選ばれている。60代以降ホームヘルパーまたは老人ホームが一番多く選ばれ、70代、80代および20代では娘が二番目に多く選ばれている。(70代、20代では老人ホームと娘が同率二位)

配偶者の有無(表8)から見ると既婚、未婚の場合は夫が最も多くの割合を占める。次に老人ホーム、ホームヘルパーである。一緒に住みたいのは配偶者に続いて娘が二番目に多く選ばれていたが介護となると、娘は老人ホーム、ホームヘルパーの後になる。死別の場合はホームヘルパーが一位で二位が娘となっている。

職業別(表9)ではサラリーマンでは夫、老人ホームそして娘、ホームヘルパーの順、専業主婦では夫、ホームヘルパー、老人ホーム、娘の順、自営業・自由業ではホームヘルパー、娘そして夫、老人ホームの順である。かつては介護は嫁の役目であったが、嫁の割合はどの年代でも、職業でも非常に少ない。また、娘とは一緒に住みたいが、介護となると娘をそれほどは求めていることが分かる。なお、息子にいたっては介護者と考えている女性は皆無にちかい。娘とは一緒に住みたいが、それは介護を求めてではなく情緒的つながりを求めていることが分かる。かつての家には子どもの世話だけでなく、老親の世話という養護の役割、機能があったが、現在その役割、機能は失われつつあるのかもしれない。また、世話(養育)したので、世話(介護)してもらうこと(give and take)は当然といった考え方もなくなっているといえる。

## 2) <生活の基盤(老後の生活費について誰をあてにしているか)>

年代別の割合を表10に、配偶者の有無(未婚・既婚・離別・死別)別割合を表11に、職業別割合を表12に示した。

表10 生活の基盤(年代別)

年代	子ども	自分	夫	公的扶助	その他
20	3%	48%	26%	20%	3%
30	0%	50%	32%	17%	1%
40	0%	37%	41%	17%	4%
50	1%	36%	45%	15%	3%
60	2%	38%	43%	13%	4%
70	4%	52%	33%	6%	5%
80	5%	66%	12%	10%	7%
全体	2%	45%	36%	13%	4%

表11 生活の基盤(配偶者の有無別)

配偶者の有無	子ども	自分	夫	公的扶助	その他
未婚	2%	62%	13%	17%	6%
既婚	1%	38%	46%	12%	3%
離別	5%	67%	0%	24%	5%
死別	8%	66%	3%	15%	9%

表12 生活の基盤(職業別)

職業	子ども	自分	夫	公的扶助	その他
会社・団体などの役員	8%	65%	27%	0%	0%
管理的職業	0%	56%	22%	22%	0%
事務的職業	1%	55%	30%	12%	1%
専門的・技術的職業	2%	64%	14%	16%	4%
販売サービスの職業	0%	32%	42%	23%	3%
技能的・労務的職業	0%	40%	30%	30%	0%
自営業主・家族従業員	1%	51%	31%	12%	4%
自由業	7%	40%	27%	27%	0%
専業主婦	1%	29%	56%	11%	2%
無職	5%	59%	11%	14%	11%
その他	2%	33%	45%	15%	5%

年代別(表10)にみると40代、50代、60代では夫が最も多いが、それ以外の年代では自分の割合が最も多くなっている。配偶者の有無別(表11)では、既婚のみ夫が最も多いが、それ以外では自分の割合が最も多くなっている。職業別割合(表12)でも専業主婦では夫が最も多いが、サラリーマン、自営業・自由業では自分の割合が最も多くなっている。自立した女性の姿が窺えるが、公的扶助に対する考え方の問題がここには含まれるかも知れない。年金をもらう場合「公的扶助」と捉えるのか、自分または配偶者と協同で働いた結果であり「自分」と捉えるのか、双方の考えが混在している可能性がある。また、ここでも子どもはほとんどあてにされておらず、死別の場合子どもを8%選んでいるのが最大でどの年代、どの職業でも子どもをあてにしているのは5%以下である。

## 2. 幸福な老い(老後の生きがい)

### 1) 3つまでの選択

「健康であること」「経済的に豊かである」「夫婦円満である」「生きがいとなる趣味を持つ」、「自分らしくある」が多く選ばれ、逆に「子どもたちと一緒に暮らせる」「長生きできる」はほとんど選ばれなかった。また、「友

人が多い」は多くはないが、少なくともなかった。

年代別の割合を表13に、配偶者の有無(未婚・既婚・離別・死別)別割合を表14に、職業別割合を表15に示した。

年代別(表13)にみると「健康であること」はどの年代でも最も多く選ばれている。20代、30代では「夫婦円満である」が次に多く選ばれているが、「夫婦円満である」を選ぶ割合は年代が高くなるにつれて減少してい

る。40代～70代では「夫婦円満である」に代わって「経済的に豊かである」が「健康であること」の次に選ばれている。なかでも40代、50代で「経済的に豊かである」を選ぶ割合が多い。80代では「生きがいとなる趣味を持つ」が「健康であること」の次に多く、「経済的に豊かである」は三番目となっている。また20代においては二番目に多いのは「生きがいとなる趣味を持つ」であり「経済的に豊かである」は三番目となっている。

表13 老後の生きがい(年代別)

年代	長生きできる	健康である	経済的に豊かである	夫婦円満である	子どもたちと一緒にくらせる	友人が多い	生きがいとなる仕事をもつ	生きがいとなる趣味をもつ	自分らしくある	その他	計
20	2%	84%	33%	54%	1%	24%	8%	50%	32%	1%	289%
30	2%	92%	48%	49%	2%	21%	8%	35%	33%	1%	289%
40	1%	89%	56%	48%	3%	18%	10%	41%	27%	0%	293%
50	5%	80%	55%	43%	3%	13%	10%	30%	34%	0%	273%
60	2%	87%	48%	38%	3%	17%	8%	42%	40%	1%	285%
70	7%	91%	46%	35%	5%	24%	7%	43%	28%	0%	286%
80	15%	91%	36%	26%	17%	21%	6%	43%	26%	0%	281%
全体	4%	88%	48%	42%	4%	20%	8%	40%	32%	0%	286%

表14 老後の生きがい(配偶者の有無別)

配偶者の有無	長生きできる	健康である	経済的に豊かである	夫婦円満である	子どもたちと一緒にくらせる	友人が多い	生きがいとなる仕事をもつ	生きがいとなる趣味をもつ	自分らしくある	その他	計
未婚	4%	83%	39%	36%	1%	22%	10%	57%	38%	2%	291%
既婚	3%	88%	49%	49%	3%	17%	8%	36%	30%	0%	284%
離別	19%	86%	67%	5%	0%	24%	14%	29%	52%	0%	295%
死別	9%	87%	46%	6%	8%	34%	8%	50%	36%	0%	286%

表15 老後の生きがい(職業別)

職業	長生きできる	健康である	経済的に豊かである	夫婦円満である	子どもたちと一緒にくらせる	友人が多い	生きがいとなる仕事をもつ	生きがいとなる趣味をもつ	自分らしくある	その他	計
会社・団体などの役員	0%	85%	37%	41%	4%	15%	19%	33%	33%	0%	267%
管理的職業	11%	100%	44%	56%	0%	11%	11%	44%	22%	0%	300%
事務的職業	1%	90%	53%	42%	0%	23%	5%	38%	32%	0%	284%
専門的・技術的職業	2%	82%	42%	40%	3%	21%	18%	42%	38%	1%	290%
販売サービスの職業	3%	90%	55%	39%	0%	19%	10%	52%	29%	0%	297%
技能的・労務的職業	0%	55%	55%	36%	0%	18%	0%	45%	9%	0%	218%
自営業主・家族従業員	1%	82%	61%	41%	1%	14%	13%	33%	36%	0%	282%
自由業	0%	81%	63%	63%	0%	13%	19%	38%	13%	0%	288%
専業主婦	4%	90%	46%	49%	5%	18%	2%	38%	33%	0%	285%
無職	14%	93%	47%	20%	8%	26%	5%	54%	27%	0%	294%
その他	5%	88%	51%	40%	2%	25%	14%	35%	30%	0%	289%

各項目を年代的にみていくと、「経済的に豊かである」は20代ではそれほど多くないが、30代40代と増加し、40代50代で最も多くそのあとの年代で減少していき80代で20代とほぼ同じ割合に戻っている。逆に、「生きがいとなる趣味を持つ」は20代で多いが、そのあと減少傾向にあり、50代で最も少なくその後の年代でまた増加傾向をみせている。また、「友人が多い」もそれを選ぶ割合はそれほど多くないが、「生きがいとなる趣味を持つ」とほぼ同じ年齢傾向をみせている。生きがい対象の「気ままな生活 対 社会的責任のある生活」尺度からとらえると、「経済的に豊かである」は社会的責任のある生活に、「生きがいとなる趣味を持つ」は気ままな生活に関する項目であり、西村(2005)が述べているように生きがいの対象がアンビバレントな関係にあり、仕事や家庭など社会的責任のある生活の方向で生きがいを感じる場合は気ままな生活の方向で生きがいを感じることは難しい、逆に気ままな生活の方向で生きがいを感じる場合は社会的責任のある生活の方向で生きがいを感じることは難しいと考えられる。(「友人が多い」もサラリーマンを対象にした場合は内面的充実の項目であったが、専業主婦の場合は健康づくり・気ままな項目と推測され、この生きがいの対象がアンビバレントな関係にあるという仮説を支持するものと思われる)

配偶者の有無(表14)でも「健康であること」は未婚・既婚・離別・死別いずれの場合も最も多く選ばれている。未婚では二位「生きがいとなる趣味を持つ」、三位「経済的に豊かである」四位「自分らしくある」五位「夫婦円満である」の順に多い。死別では四位までは未婚と同様であるが、五位に「友人が多い」が選ばれている。既婚の場合は「夫婦円満である」と「経済的に豊かである」が同率二位で、四位五位は「生きがいとなる趣味を持つ」「自分らしくある」となっている。

職業別(表15)では、専業主婦の場合、二位「夫婦円満である」三位「経済的に豊かである」、四位五位は「生きがいとなる趣味を持つ」「自分らしくある」となっている。サラリーマンでは二位は「経済的に豊かである」そして三位四位は「生きがいとなる趣味を持つ」「夫婦円満である」そして五位「自分らしくある」となっている。また、自営業・自由業では二位は「経済的に豊かである」三位「夫婦円満である」、四位五位「生きがいとなる趣味を持つ」「自分らしくある」となっている。既婚者、専業主婦は家庭的幸せを求めた結果が結婚し、主

婦になっていることであるとすれば、「夫婦円満である」ことを幸福な老いの条件にあげているのはうなずける。しかし、「子どもたちといっしょにくらす」ことはどの年代でも幸福な老いの条件、老後の生きがいにはあげられていない。いまや家、血縁としてのつながりではなく個人としてのつながりに生きがいを見出していることがわかる。

## 2) 3つのうちの優先順位一位の選択

「健康であること」がどの年代で最も多い。全回答者の77%が「健康であること」と答えている。年代別にみると20代では47%だが30代68%、40代78%、50代81%、60代84%、70代85%、80代91%と年代が上がるともに割合が増えている。二番目は「夫婦円満である」で全回答者の8%、三番目は「自分らしくある」7%、四番目は「経済的に豊かである」4%、五番目「生きがいとなる趣味を持つ」2%となっている。現在感じているサラリーマンの生きがいを調査した財団法人シニアプラン開発機構(2002, 2003)でも女性は年齢が上がるともに内面的充実から健康づくりに移行する傾向があることが指摘されているが、今回の幸福な老いのデータでもその傾向は窺える。

## まとめ

### 1. 老後の生き方

1) 若い世代では老後の生き方として「だれかと一緒に暮らす」ことを理想としている。しかし、実際老後の生活をおくっている70代80代の世代では、「だれかと一緒に暮らす」ことを理想とするタイプと「ひとりで暮らす」ことを理想とするタイプの2タイプに分かれることが示された。

2) 「だれかと一緒に暮らす」ことを理想とする場合、その誰かは、圧倒的にどの年代でも夫が多く選ばれていた。夫以外では、どの年代でも息子より娘を多く選ぶ傾向がみられた。

3) 寝たきりとなり身の回りの世話が必要となった場合、主にだれに身の回りの世話を頼みたいかに関しては、50代までは夫を、60代以降はホームヘルパーまたは老人ホームが一番多く選ばれていた。嫁、息子を選ぶ割合はどの年代でも非常に少なかった。また娘はホームヘルパーまたは老人ホームの次に選ばれることが多く、娘と一緒に住みたいが、介護となると娘をそれほどは求め



ていないことが示された。

4) 老後の生活費について誰をあてにしているかに関しては40代、50代、60代では夫が最も多いが、それ以外の年代では自分が最も多くなっていた。ここでも子どもはほとんどあてにされていないことが示された。

## 2. 老後の生きがい (幸福な老い)

1) 「健康であること」がどの年代でも圧倒的に多く選ばれていた。択一条件で「健康であること」を選ぶ割合は年代が上がるほど多くなることが示された。

2) 「健康であること」以外では「夫婦円満である」「経済的に豊かである」「自分らしくある」などが多く選ばれていたが、「子どもたちといっしょにくらす」ことはどの年代でもほとんど選ばれていなかった。家、血縁としてのつながりではなく個人としてのつながりに生きがいを見出している（見出そうとしている）ことが窺えた。

## 付 記

本研究は東京家政大学大学院共同研究の一環として実施されたものである。

## 引用文献

- 1) 井森澄江 (2006) 親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅰ：家族構造の世代差 東京家政大学研究紀要第46集(1)
- 2) 西村純一 (2005) サラリーマンの生きがい対象の構造、年齢差および性差の検討 立教大学社会学部応用社会学研究No.47
- 3) シニアプラン開発機構 (2002) 第3回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査～サラリーマンシニアを中心にして～
- 4) シニアプラン開発機構 (2004) 「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」のフォローアップ調査

### Abstract

In this study, we analyzed an awareness survey of lifestyles and getting old, where the survey was made to 979 women in their twenties to eighties and receiving a university education. Analyzing the survey, we studied ideal life and happiness of women in their old age. The results are as follow:

#### 1. Life courses in one's old age

- 1) Young generation chose "living together with someone" as an ideal life in her old age. However the women in their seventies and eighties, who are actually living a life of old age, are classified into two groups. The women in one group thought "living together with some one" was ideal, while "living alone" was preferred in the other group.
- 2) Where the ideal was "living together with someone", the husband was overwhelmingly selected as that someone in any generation. In case of that someone other than the husband, daughters were preferred to sons in any generation.
- 3) They would like to live together with their daughters, but the daughters were not expected to take nursing care of them. No one in any generation expected their sons or daughters-in-law of nursing care for them.
- 4) Living expenses in old age were thought to be covered by income of the husband by the women in their forties, fifties and sixties, while the women in other generation thought that the expenses were paid by their own earnings. Children were hardly relied on in this point.

#### 2. Happiness in old age

- 1) An overwhelming majority of women in all generation thought "being healthy" was the happiness in old age, and the ratio of the women thinking similarly increased as the age advanced.
- 2) Next to "being healthy", a harmonious family and economic comfort came into the happiness in old age. Yet living with children were rarely thought of happiness in old age in any generation.